

高校生の介護意識の実態と課題

— 高等学校 3 校のアンケート調査から —

青柳 育子

(仙台白百合女子大学)

【要旨】

本研究では、まだ「介護」とさほど関係なく暮らしているが、今後成人し、介護問題に直面することであろう高校生を対象に現在の介護に対する意識調査を実施し、中等教育との関係を考察した。

結果、高校生は中学や高校で福祉について学び、また「高齢社会」や「介護に関する問題」等について毎日のように報道される現状に暮らしているのだが、「高齢社会」に関心を持っているものは約半数であった。家族と介護について話したことがあるものは3割おり、「介護の仕事は重要」と9割以上が答えたが、「中学・高校で介護を学びたい」ものは3割に満たない。介護意識では男女間で差が認められ、女子の方が介護に対して前向きの回答が多かった。今回、中等教育における「介護」に関する学習について課題を見出した。

1. はじめに

わが国の高齢化は急速に進展し、2007年総務省発表によれば、9月15日現在の65歳以上の高齢者人口は、2740万人となり、全人口に占める割合は21.5%となった¹⁾。今後、2050年には高齢化率35.7%まで上昇すると見込まれ、3人に一人は高齢者となる。また、何らかの手助けが必要となる75歳以上の後期高齢者は2005年現在で1100万人を超しており、20年後の2025年には2000万人を越すと見込まれ、介護問題は今以上に深刻になると予測できる。

学習指導要領²⁾でみると、学校教育の中で介護に関する学習や体験について、中学校では「社会」や「技術・家庭」の家庭分野で、少子化や高齢化に伴う課題があることや、地域に暮らす高齢者とのかかわりを学んでいる。また、総合的学習の時間に、老人ホームの訪問やボランティア活動を体験させている学校についてよく話を聞く。高等学校では、「公民」で少子高齢化の課題について、「家庭」で高齢者の生活と福祉について学んでいる。総合学習の時間に、中学校同様に老人ホームの訪問やボランティア活動を体験させる学校がある。一方で、家庭での介護体験は、核家族化の進展と共に、身近で介護を見たり体験する機会をもつ生徒は少なくなっていると考ええる。

今回、このような現状の中で暮らす高校生を対象に、現在の介護に対する意識調査を行い、中等教育での介護の学習について考察を試みた。

2. 調査の概要

(1) 調査目的

高校生の介護意識を知り、高齢社会における介護の学習の課題を明らかにする。

(2)調査対象

東京都・神奈川県・宮城県の高校で、調査協力のあった高等学校3校の高校生 660 名。
有効回答 632 (95.8%)

(3)調査方法

家庭科の教員が授業中に質問紙を配布、無記名で回答してもらい回収した。生徒には研究の主旨とプライバシーの保護について伝えた。

(4)調査時期

平成 19 年 6 月

(5)調査内容

介護を、「お世話すること」、介護士を、「お年寄りや障がいを持った方の暮らしを支えるために、日常生活のお世話する専門職」と説明し、性別・学年・祖父母と同居か・身近に介護の必要な人がいるかなど生徒自身のことのほか、介護に関する意識 12 問に 4＝強く思う、3＝思う、2＝あまり思わない、1＝まったく思わない、の 4 段階に答えてもらった。介護の学習等に関する 6 問に対しては、3＝はい、2＝わからない、1＝いいえの 3 段階に答えてもらった。

(6)集計と分析

SPSS-X (Ver.10) による単純集計とクロス集計、Pearson のカイ 2 乗検定を行った。

3. 結果

(1) 対象者の通う高校と高校生

対象者の通う高校と高校生は、第 1 表のように、宮城県の高校生が 287 名 (45.5%)、東京都の高校生が 133 名 (21.0%)、神奈川県の高校生が 212 名 (33.6%) である。性別は、第 2 表のように、調査高校 3 校のうち 2 校が女子高校であるため、男子が 100 名 (15.8%)、女子が 532 名 (84.2%) である。

第 1 表

	生徒数	%
宮城(女子高)	287	45.5
東京(女子高)	133	21.0
神奈川(共学)	212	33.6
合計	632	100.0

第 2 表

	生徒数	%
男子生徒	100	15.8
女子生徒	532	84.2
合計	632	100.0

第 3 表

	生徒数	%
1年生	407	64.4
2年生	91	14.4
3年生	134	21.2
合計	632	100.0

第 4 表

	生徒数	%
同居あり	164	25.9
同居なし	468	74.1
合計	632	100.0

第 5 表

	生徒数	%
身近にいる	107	16.9
いない	525	83.1
合計	632	100.0

学年は、第 3 表のように家庭科授業がおかれた学年などにより、1 年生が、407 名 (64.4%)、2 年生が 91 名 (14.4%)、3 年生が 134 名 (21.2%) である。

また、祖父母との同居は、第4表のように、同居が164名(25.9%)、なしが468名(74.1%)である。介護を必要としている人が身近にいるかの有無には、第5表のように、いるものが107名(16.9%)、いないものが525名(83.1%)である。

(2) 介護に関する意識

介護に関する意識の問いを12問用意し、問いに対して、「4・強く思う」「3・思う」「2・あまり思わない」「1・まったく思わない」の4段階で回答してもらった結果、第6表のようになった。

第6表		上/実数 下/ %				n=632	
		強く思う 4	思う 3	あまり思わ ない 2	まったく思わ ない 1	平均 値	標準 偏差
1	高齢社会に関心がある	57 9.0	277 43.8	251 39.7	47 7.4	2.54	0.76
2	祖父母に介護が必要となったら 介護をしたい	121 19.1	307 48.6	167 26.4	37 5.9	2.81	0.81
3	父母に介護が必要となったら介護 をしたい	208 32.9	315 49.8	88 13.9	21 3.3	3.12	0.77
4	家族の介護は家族が行うのがよい	148 23.4	327 51.8	139 22	18 2.8	2.96	0.75
5	家族の介護は介護士に頼みたい	42 6.6	236 37.3	312 49.4	42 6.6	2.44	0.72
6	家族の介護は家族と介護士で行う のがよい	167 26.4	324 51.3	115 18.2	26 4.1	3.00	0.78
7	自分が介護が必要になったら家族 に世話して欲しい	118 18.7	241 38.1	196 31	77 12.2	2.63	0.92
8	自分が介護が必要になったら介護 士に世話して欲しい	37 5.9	245 38.8	277 43.8	73 11.6	2.39	0.77
9	自分が介護が必要になったら家族 と介護士で世話して欲しい	98 15.5	264 41.8	211 33.4	59 9.3	2.63	0.85
10	介護の仕事は重要である	310 49.1	287 45.4	26 4.1	9 1.4	3.42	0.64
11	介護の仕事に就きたい	19 3.0	74 11.7	275 43.5	264 41.8	1.76	0.77
12	中学や高校で介護を学びたい	40 6.3	145 22.9	260 41.1	187 29.6	2.06	0.88

- 1) 「高齢社会に関心がある」の問いには、関心があると答えたものが約半数の52.8%であった。
- 2) 「祖父母に介護が必要となったら介護をしたい」の問いには、そう思うものは67.7%で、「父母に介護が必要となったら介護をしたい」は82.7%であった。介護により近い祖父母の方が15.0ポイント少ない。
- 3) 「家族の介護は、家族が行うのがよい」の問いでは、そう思うものが75.2%で、「介護士に頼みたい」は43.9%、「家族と介護士とで行うのがよい」は77.7%であった。介護には、専門職の世話だけでなく家族も参加した方がよいと考えるものが多かった。
- 4) 自分に置き換えた問いの「自分が介護が必要になったら家族に世話して欲しい」と思うものは56.8%、「介護士に世話して欲しい」は44.7%、「家族と介護士に世話して欲しい」は57.3%であった。家族の介護と比べ、自分の介護では家族にして欲しいものは18.4ポイント少なく、家族と介護士には20.4ポイント少ない。介護士に世話してほしいが

0.8 ポイント多かった。自分が高齢者となり、その家族である妻や夫、子どもなどに介護される自分自身が想像できないのかもしれない。

- 5) 「介護の仕事は重要」と思うものは 94.5%、「介護の仕事に就きたい」は 14.7%、「中学や高校で介護を学びたい」は 29.2%であった。祖父母の介護には 67.7%、父母の介護には 82.7%係わりたいと答えているが、中学や高校で介護を学びたいものは 29.2%である。介護は学ばなくてもできると考えているのか、今学ぶのではなく、そのような状況になったら学びたいと考えているのだろうか。

(3) 4 段階の回答の平均値と標準偏差

意識調査の 4 段階回答の平均値と標準偏差は、第 6 表右側のようになった。高かったものの上位 3 つは、1 位の「介護の仕事は重要である」が、平均値 3.42 (標準偏差 0.64) で、2 位「父母に介護が必要となったら介護をしたいと思う」が、平均値 3.12 (標準偏差 0.77)、3 位「家族の介護は、家族と介護士とで行うのがよい」が、平均値 3.00 (標準偏差 0.78) であった。反対に平均値の低いものは、「介護の仕事に就きたい」が、平均値 1.75 (標準偏差 0.77)、「中学や高校で介護を学びたい」が、平均値 2.06 (標準偏差 0.88) であった。

(4) 介護の学習等に関する状況

第 7 表は、介護の学習等に関する問い 6 問に対して 3 段階、「はい・3」「いいえ・1」「わからない・2」に答えてもらった結果である。

- 1) 「家族で介護の話をすることがある」のは、27.7%であり全体の 1/3 に満たない。また、「介護に関心がある」のも 28.0%でこちらも 1/3 に満たなかった。
- 2) 「中学の授業やクラブ活動で老人ホームに行ったことがある」では、行ったことがあるものが 57.6%であるが、高校で行ったことがあるものは 6.6%であった。調査対象者が高校 1 年生が 6 割を越しており、調査時期が 6 月といったことが関係しているものと考えられる。
- 3) 「中学で介護を学んだ」では 42.4%、高校では 13.6%であった。こちらも調査対象者が高校 1 年生が多かったことと調査時期が 6 月であったことが関係していると考ええる。

第 7 表		上 / 実数 下 / (%)			n=632
		はい	いいえ	わからない	
	質問	3	1	2	
1	家族で介護の話をすることがある	175 27.7	383 60.6	74 11.7	
2	介護に関心がある	177 28.0	287 45.4	168 26.6	
3	中学で老人ホームに行ったことがある	364 57.6	257 40.7	11 1.7	
4	高校で老人ホームに行ったことがある	42 6.6	575 91.0	15 2.4	
5	中学で介護を学んだ	268 42.4	268 42.4	96 15.2	
6	高校で介護を学んだ	86 13.6	466 73.7	80 12.7	

- (5) 介護に関する意識 12 問と生徒の状況・介護の学習等とのクロス集計と検定
介護に関する意識 12 問と「性別」「祖父母と同居の有無」「身近に要介護者がいるか」

「家族で介護の話をすることがある」「介護に関心がある」「中学で老人ホームに行ったことがある」「高校で老人ホームに行ったことがある」「中学で介護を学んだ」「高校で介護を学んだ」の項目をクロス集計し、カイ二乗検定を行った。結果、第8表のようになった。

- 1) 性別と12問をクロス集計し、カイ二乗検定した結果、有意差が認められたものが10問、認められなかったのが2問であった。有意に差のあった問いはすべて女子がそう思うと答えたものが多かった。「家族の介護は介護士に頼みたい」と「自分に介護が必要になったら介護士に世話して欲しい」の2問が男女差は認められなかった。「中学・高校で介護を学びたい」と強く思う男子は100名中誰もいなかった。
- 2) 祖父母と同居の有無とでは、「家族の介護は家族と介護士で行うのがよい」だけが有意差が認められた。同居しているものより同居していないものの方が多かった。
- 3) 「父母に介護が必要になったら介護したい」と考えるのは、身近に介護を必要とする人がいないものの方が多く、「家族の介護は家族と介護士で行うのがよい」「自分に介護が必要になったら家族と介護士で世話してほしい」「介護の仕事は重要」については、身近に介護を必要としている人がいるものの方が多かった。身近で介護を見ると、専門職の助けが重要なことに気づくのだろう。
- 4) 家族で介護の話をすることのあるものと介護に関心があるもので有意差が認められた10問は、性別で有意差が認められた10問と同じ項目であった。そこで、性別と「家族で介護の話の有無」、「介護に関心があるの有無」をクロス集計し、カイ二乗検定を行った結果、「家族で介護の話の有無」では χ^2 値=8.418で、5%水準で有意差が認められ、「介護に関心があるの有無」では、 χ^2 値=34.865で、0.1%水準で有意差が認められた。男子より女子が、家族で介護の話をするものが多く、介護に関心のあるものが多いというである。「家族の介護は介護士に頼みたい」「自分に介護が必要になったら介護士に世話してほしい」の2項目が有意差が認められなかった。

第8表 介護の意識12問と性別・同居の有無・要介護者の有無等とのカイ二乗検定結果

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12
	高齢社会に関心がある	祖父母の介護をしたい	父母の介護をしたい	介護は家族で	介護は介護士に	介護は家族と介護士で	自分の介護は家族で	自分の介護は介護士で	自分の介護は家族と介護	介護の仕事は重要	介護の仕事に就きたい	中学・高校で介護を学びたい
性別	***	*	***	*		*	*		*	***	**	***
祖父母と同居の有無						*						
身近に要介護者の有無			*			**			***	*		
家族で介護の話の有無	***	***	***	**		*	**		*	***	***	***
介護に関心があるの有無	***	***	***	***		***	**		*	***	***	***
中学で老人ホームに行ったの有無	*	*	**							***		
高校で老人ホームに行ったの有無	*										**	**
中学で介護学習の有無	*	*					*			**	*	**
高校で介護学習の有無											***	***

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05

- 5) 中学で老人ホームに行ったことのあるものは、「高齢社会に関心がある」「祖父母に介護が必要になったら介護したい」「父母に介護が必要になったら介護したい」「介護の

仕事は重要である」と思うものが多く、高校で行ったものは、「高齢社会に関心がある」「介護の仕事に就きたい」「中学・高校で介護を学びたい」と思うものが多かった。

- 6) 中学で介護を学んだものは、「高齢社会に関心がある」「祖父母に介護が必要になったら介護したい」「自分に介護が必要になったら家族に世話して欲しい」「介護の仕事は重要である」「介護の仕事に就きたい」「中学・高校で介護を学びたい」と思うものが多く、高校で学んだものは、「介護の仕事に就きたい」「中学・高校で介護を学びたい」と思うものが多かった。

4. 考察・課題

(1) 現在、高齢化率は21%を超え、人口の5人に一人は65歳以上の高齢者となり、わが国は超高齢社会に突入した。毎日、年金問題や介護問題、孤独死、虐待等、高齢者に関する報道のない日がないのだが、高齢社会に関心を持っている高校生は52.8%で約半数であった。祖父母とは4人に一人が同居であるが、高校生の祖父母はまだ60～70歳代と考えられ、元気高齢者が多いためなのか、今回の調査では同居の有無と高齢社会に対する関心の高さは関係ないことがわかった。また、身近に要介護の人がいる高校生は約6人に一人いたが、介護に関わっていないためか、要介護者の有無と高齢社会に対する関心の高さも関係ないとわかった。

9年前の1998年に実施された兵庫県の高校9校511人の調査³⁾では64.9%のものが「高齢社会に関心がある」と答えているのと比較すると、12.1ポイント下がったことになる。地域差もあるだろうが、高齢化は上昇しているが、関心は下がっているということになり、高齢者や社会に関心が向かない高校生が増えているとも考えられる。

高齢社会に関心があるものは、男子より女子が多く、介護に関心があり、家族で介護の話をするものであった。そして、中学や高校で老人ホームに行ったことがあり、中学で介護を学んだものの方が多い。高校生に現在の高齢社会に関心を向けさせるには、中学や高校で老人ホームの見学や介護学習を行い、家庭で話し合うような内容を学ばせることが効果があるのではないかと考える。

(2) 家族介護について、高校生は祖父母の介護を67.7%が、父母の介護を82.7%が行いたいと答えている。また、介護は家族が行うのがよいと答えたのは75.2%、介護士に頼みたいは43.9%、家族と介護士と答えたのは77.7%であった。

祖父母と同居している生徒と、身近に要介護者がいる生徒双方とも、介護は「家族の介護は、家族と介護して行うほうがよい」と思うものの方が多かった。身近に高齢者や要介護者のいるものは、普段から高齢者と関わり、介護を見ることで、家族だけの介護は無理があり、専門家の手助けが必要なることを感じるであろう。

祖父母と同居しているもので介護を学びたいと思うものは28.7%おり、要介護者が身近にいて介護を学びたいものが33.6%で、全体でも学びたいと思うものが29.2%いる。介護はまだまだ先のことと考えているのか、祖父母や父母の介護を行いたいと考えてはいるが、中学や高校で学びたいと考えるものは少ない。特に、男子は学びたいと強く思うものはゼロである。しかし、約3割であるが学習希望者がいて、家庭での介護学習・体験が難しいと考えられる現在、学校教育で介護の学習機会を作ることは意味あることと考える。突発的に家族に介護が必要になったとき、介護の知識と技術を身につけていることが不安

を和らげることになる。筆者が勤務する介護福祉士養成校に入学する学生の入学動機に、家族に介護が必要になった時に自分が何もできなかったことを残念に思い続け、入学するものが毎年数人いる。そして、学び始めると、介護の知識があれば倒れた家族にもっと何かが出来ていたと、介護を早く知りたかったと話をする。最近、高等学校学習指導要領に「乳幼児や児童とのふれ合いや交流の機会をもつ」の文言が明記されており、高校で乳幼児発達や生活を学ぶ学習の一環として保育所で保育体験学習を行う学校が増えている。少子化が進む現在、乳幼児を育てている大人や乳幼児と接する機会をもつことが難しい今の高校生には必要な教育と考えるし、その成果に関する研究も発表されている⁴⁾。介護学習に関しても、同様ではないかと考える。

介護を学ぶ場合には、特に、老人ホーム見学の前には施設の意味や施設に暮らす人々のこと、人間の老年期について学ぶことが、見学学習の意味を深めることになるだろう。また、施設で暮らす方々への配慮についても学ぶ必要がある。中学・高校の時期から介護について学ぶ事は、高齢社会に暮らす若者の生きる力の一つになるだろう。

(3) 中学で老人ホームに行ったことのあるものと介護を学んだもの、高校で老人ホームに行ったことのあるものと介護を学んだもので介護に対する意識が共通に多いといえるものがなかった。その中で、高校で老人ホームに行ったものと介護学習をしたものは、「介護の仕事に就きたい」「中学や高校で介護を学びたい」の2項目が共に多かった。高校生の場合は、これからの進路を考える時期でもあり、介護に関心を持ったものが「介護の仕事に就きたい」と思い、「介護を学びたい」と答えたのだろう。老人ホームの見学や介護学習は専門性が高いので、できれば施設職員などの専門家による授業が学習効果をあげると考える。いずれにせよ、見学した老人ホームの種類や中学や高校で実施されている教育の内容も調査して分析する必要があった。

(4) 介護の仕事については、94.5%のものが重要と考えているが、85.3%のものは介護の仕事に就きたいと思っていない。昨今、介護従事者の報酬の少なさや仕事の難しさ、離職率の高さなどが報道されることが多々あり、介護職は敬遠される傾向にある。昭和63年から始まった介護福祉士の資格制度であるが、介護福祉士を希望する生徒が激減し、近年、養成校の中で生徒募集を停止する学校も出てきた。

高齢者はまだまだ増加するのだが、介護職に対する希望者が減少していることから、国は外国人介護者の養成に乗り出した。しかし、国民はそれを望んでいるだろうか。今回、高校生で介護の仕事に就きたいと考えるものが14.7%いた。そして、そう思うものは、高校で老人ホームの見学をしたものや中学や高校で介護を学んだものの方が見学しないものや学んでないものより多かった。知識のないことが、希望者を少なくしているとも考えられる。希望者にはインターンシップやキャリア体験等の機会を作ったり、総合的な学習の時間を活用した学習機会を作り、生徒自身が知識を持って職業を選択できるように支援する必要がある。

(5) 性別に見てみると、女子のほうが男子より介護に対する意識が高い。女子のほうが介護に関心があり、家族で介護の話をする事が多かった。また、家族の介護をしたいと思うものや、介護の仕事は重要で、介護を学びたい、介護の仕事に就きたいと思うものも多かった。家庭科が男女共修になって久しい。また、他の教科もほとんど共修しているのだが、高校生に成長する間に、自然に介護に対する性差による考えが身についてしまうのだ

ろうか。男子で中学や高校で介護を強く学びたいと思うものは 1 人もいない。自分の祖母や父母が、また、結婚したあとで配偶者などが介護を必要とするようになったら誰が介護を担うと考えているのだろうか。

高齢者虐待の現状をみると、家庭内では男性から女性に対するものが多く、介護の知識不足も関係していると考えられるものが多い。家庭で介護体験する機会の少なくなった現在、学校教育での介護教育は意味あるものとする。

(6) 今回の調査は、対象が高校 1 年生が多く調査時期が 6 月であったので、中学のことだけで見ると、中学で老人ホームに行ったことがあるのは 57.6%、介護を学んだのは 42.4%であった。このことは、約半数の生徒は学んでおり、約半数の生徒は学ぶ機会をもたなかったということである。老人ホームを見学することや介護の学習は、人間が成長しその終わりの時期があるという生涯発達の学びとなる。最近、受験と関係ない科目を教えない高校が全国的に多数あったと報道された。介護の学習は受験とまったく関係ないが、共に生きていくための力となる学習の一つと考える。

5. おわりに

本研究では、高等学校 3 校の高校生の介護意識調査から中等教育での介護学習の必要性を考察した。本来であれば、地域をより広範にした調査を行い、また、中学校や高等学校で実際に行われている介護に関する授業内容も調査し、それと一緒に考察する必要があった。今後は、さらに調査研究の精度を向上させていくことが課題である。

アンケート調査に協力いただいた小出先生、猪股先生、多くのアドバイスをいただいた文教大学名誉教授の稲越先生、又、回答をいただいた高校生にここからお礼を述べたいと思います。

注記・引用文献

- 1) 長寿社会開発センター「老人福祉のてびき平成 18 年度版」2006 年, p 1～5
- 2) 中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領 2007 年 11 月 2 日参照
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122602.htm
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122603.htm
- 3) 大前衛「添川女子短期大学紀要」『高校生の福祉や家族介護に対する意識に関する研究（その 1）』1999 年, p 36～41
- 4) 小林京子・高橋美与子「乳幼児とのふれあい体験学習の成果」広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要第 37 巻, 1997 年
- 5) 坂野貢「学校教育づくりと福祉教育」2003 年, 文化書房博文社 p 12～15
- 6) 福崎哲他「第 19 回滋賀県社会福祉学会要旨集」『福祉科高校生と普通科高校生の介護意識について』2001 年, p 67
- 7) 中間美砂子他中学教科書「家庭」開隆堂, 2007 年, p 192～197
- 8) 伊東光晴他中学教科書「公民」日本文教出版, 2001 年, p 48～53